

# 韓国人日本語学習者と日本語母語話者による 普通体基調会話に出現した文体上の逸脱の分析<sup>1</sup>

石 川 朋 子

(国際教育交流センター非常勤講師)

## キーワード

普通体基調会話、接触場面、韓国人日本語学習者、大学生、文体、逸脱

## 要 旨

本稿では、日本語学習者向けの普通体基調会話教育の方法開発への応用を念頭に、共に大学生で、且つ、友人関係にある韓国人日本語学習者と日本語母語話者の普通体基調会話から「文体上の逸脱」を抽出し分析した。抽出された「文体上の逸脱」は「形式の逸脱」と「属性の逸脱」に分類後、更に「修辭的表現」と「非修辭的表現」に分類された。分析の結果は以下の通りである。①修辭的表現となる形式の逸脱として、普通体基調会話における丁寧体の使用が抽出され、この逸脱には「談話の局面の変化」という効果が認められた。②逸脱の効果が認められないため非修辭的表現となる形式の逸脱として、終助詞「よね」の使用が抽出された。③修辭的表現となる属性の逸脱として、女性による男性的表現の使用、及び、別人を標示する表現の使用が抽出され、これらの逸脱にはそれぞれ「仲間意識の強化や親密度の確認」、「冗談」という効果が認められた。④逸脱の効果が認められないため非修辭的表現となる属性の逸脱として、男性による女性的表現「そうね」、「そうよ」の使用が抽出された。①、③の文体上の逸脱は友人同士の接触場面で観察されたわけだが、このような接触場面は日本語学習者にとって実際の場面であることを考えると、普通体基調会話教育の場では文体上の逸脱の方法とその効果を学習者に明示すべきであろう。②、④からは、日本語教育において終助詞に着目した訓練をより積極的に行う必要性が示唆される。

---

<sup>1</sup> 本稿は韓国日語日文学会 2015 年冬季国際学術大会における口頭発表の一部を修正・加筆したものである。

## 1. はじめに

本稿は、日本語学習者のための普通体基調会話教育の方法開発への応用を念頭に、共に大学生で友人関係にある韓国人日本語学習者（以下、韓国人）と日本語母語話者（以下、日本人）の普通体基調会話から文体上の逸脱を抽出し分析することを目的とする。本稿において「普通体基調会話」は「非公式な場面で同等で親しい関係にある者同士が行う、普通体がデフォルト（自然な初期設定）として選択される会話」と定義される。「文体上の逸脱」は、基調文体とは異なる文体の使用を指し、その出現は有標となる。普通体基調会話に現れる文体上の逸脱の例としては、丁寧体や堅い表現の出現、話者の性とは異なる表現の出現、話者の出身や居住地域等とは関連のない方言の出現等が挙げられる。

従来の日本語教育は、一般的に、普通体基調会話よりも丁寧体基調会話の運用能力の習熟に重点を置く傾向にある（因・王 2007）が、普通体基調会話の習熟を望む学習者のためにその教育方法を確立させる必要があると考える。「普通体基調の会話では文末におけるレベルやジェンダー、方言か標準語かなどについて何らかの選択をしなければならず、学習者にとっては丁寧体の会話よりも難しい（王 2008:107）」、「日本語学習者がある程度日本語が話せるようになると、「友人と雑談をすると、丁寧になりすぎて自分を表現できない」「日本人の友人が話す日本語と自分の話す日本語がどこか違う」のように友人との会話の際に、教科書で学んだ日本語では自分が表現できないと自信をなくしたり、違和感を持ったりする（酒井 2018:31）」といった記述からは、学習者が普通体基調会話の習得に困難を感じている様子がうかがえる。学習者本人が自らの普通体基調会話に問題を感じていないとしても、彼らと接する日本人が学習者の話し方は直接的な表現が強くて怖いと述べたり（梶原 2003）、学習者の普通体基調の会話に違和感を覚えたり（石川 2012）する例も報告されている。このような人間関係に悪影響を与えかねない現象を含め、普通体基調会話の特徴を体系的に提示することは学習者に大いに利することになろう。

普通体基調会話教育の方法開発に向けた基礎研究として筆者はこれまでに韓国人同士及び日本人同士による普通体基調会話を分析したり、韓国人と日本人双方の普通体基調会話に対する認識を調査したりした（石川 2012）。本稿では韓国人と日本人による接触場面会話を分析するが、接触場面会話には韓国人同士や日本人同士の会話より現実的な問題が反映されると推測されるため、その分析は普通体基調会話教育の方法の開発にとって必須であると考えられる。

筆者のこれまでの研究で対象となる学習者を韓国人に限定している理由は以下の2点である。ひとつは、学習者の普通体基調会話を論じる上で勘案すべき母語による影響を最小限にするためである。日本語学習者には様々な母語を持つ者が存在するが、彼らの母語の影響をひと

つひとつ検討対象に加えると議論が広がりすぎてしまう。まだ基礎研究の段階である現時点では対象者を限定し、普通体基調会話の様態そのものに注目すべきだと考える。もうひとつは、韓国人に普通体基調会話を志向する傾向があることである。韓国語にはパンマルと呼ばれる非敬体があり、それは「友達同士のくだけた言い方の代表的なもの（韓国語ジャーナル編集部 2007:109）」である。韓国語でパンマルを使用する間柄なら日本語では丁寧体ではなく普通体を使用したいと考える韓国人が多いことの背景には、母語におけるパンマル使用習慣の影響があると推測される。

## 2. 調査概要

分析データには、友人関係にあり、普段から普通体基調会話を行っている韓国人と日本人のペア4組（男女ペア1組、男性ペア1組、女性ペア2組）に雑談の録音を依頼し、それを文字化したものを用いる。被験者には、話題に窮した場合は「授業」、「サークル」、「バイト」、「夏休みの予定」といったことを話し合うよう告げ、こうしたトピックを記したメモを渡した。録音の総時間は44分29秒である。韓国人は日韓共同理工系学部留学生事業に参加している19～22歳の留学生で、上級レベル以上の日本語能力を持つ。日本人は19～20歳の学部生である。

本稿では、以上のデータから文体上の逸脱を抜き出し、それを形式の逸脱と属性の逸脱に分類する。先述の例で言うと、普通体基調会話における丁寧体や堅い表現の出現は形式の逸脱となり、話者の性とは異なる表現や話者の出身／居住地域等とは関係のない方言の出現は属性の逸脱となる。その後両者をそれぞれ修辭的表現と非修辭的表現に分けて検討を加える。各逸脱に話者の意図が認められる場合その逸脱は修辭的表現であり、認められない場合、または、話者に意図があったとしてもその意図通りに解釈することが不可能な場合は非修辭的表現となる。上記の各逸脱は韓国人同士や日本人同士の普通体基調会話に観察されたものである（石川 2012）。本稿では接触場面会話でも同様の逸脱が観察されるかどうかを確認し、観察された場合はその逸脱の記述を試みる。

## 3. 調査結果及び考察

本稿の分析対象データに出現した文体上の逸脱の数を表1に示す。

表 1. 韓国人と日本人による普通体基調会話に出現した文体上の逸脱の数

| 形式の逸脱 |     |        |     | 属性の逸脱 |     |        |     |
|-------|-----|--------|-----|-------|-----|--------|-----|
| 修辭的表現 |     | 非修辭的表現 |     | 修辭的表現 |     | 非修辭的表現 |     |
| 韓国人   | 日本人 | 韓国人    | 日本人 | 韓国人   | 日本人 | 韓国人    | 日本人 |
| 11    | 3   | 3      | 0   | 3     | 1   | 3      | 0   |

表 1 より、韓国人同士や日本人同士の普通体基調会話と同様、接触場面会話でも形式の逸脱と属性の逸脱が韓国人、日本人共に観察されたことが分かる。修辭的表現の出現数を見ると、形式の逸脱の場合も属性の逸脱の場合も韓国人の方が多。しかしこの差は有意ではないと考えられる。本稿のデータは総時間にして 44 分 29 秒であるが、統計的に有意な差のあることを証明するにはより多くのデータが必要となろう。非修辭的表現の出現数に目を向けると、こちらは形式の逸脱も属性の逸脱も韓国人にのみ観察され、日本人には観察されていないが、日本人の非修辭的表現の出現がゼロであることはごく自然なことと考えられる。というのも、非修辭的表現は逸脱の意図が認められないものであり、日本人が、単なる言い間違いはあるにせよ、何の意図もなく逸脱を行うことは殆どないと考えられるからである。

以下、それぞれの逸脱について代表例を挙げ検討を加える。

### 3-1. 形式の逸脱（修辭的表現）

まず、修辭的表現となる形式の逸脱の例を挙げる。以下のスクリプトにおいて数字は発話番号、k は韓国人、j は日本人、f は女性、m は男性、a ～ d はペア名を表す。

#### （1）形式の逸脱（修辭的表現）の例

- 7kfa : じゃ録音、しまーす。  
 8jfa : はい。  
 9kfa : わたしは [kfa] でーす。  
 10jfa : えー。[ 笑い ]  
 11kfa : そっから。  
 12jfa : えー、そお？  
 13kfa : そしたらー、はい。[ 笑い ]  
 14jfa : [ 笑い ]  
 15kfa : 恥ずかしいけどー、  
 16jfa : うん。

17kfa : おいしそうだね、[友人名]の。あれ。

(中略)

107kfa : あ、ほんと? え、でもシフト制は、ちょっと何か(うん)あれややこしいね、何か。

108jfa : 希望、出すけど、その日に入れるとは分らんくて(そうそう)、で、今までの、は、ちょ、適当、適当じゃないけど、先生がすごいシフトとかに関してはうちに任せてくれとったけん、その日に入りたいこの日入りたいとかで計算できて、友達とかと決めとったけど、今度はもう全部上の人がするけん(へえー)、そーゆーのはできんけど。

109kfa : へえ。何かね、希望、しない日にも入られる、のものあり###<sup>2</sup>。

110jfa : まあ、あたしは新人さんやけないかもしれんけど、上の方になったら、ごめんちょっと人数足りんけど入ってくれるかいなとは言われるかもしれんけど、

111kfa : あ、そうゆうのも、やるのもいいけど。あたしシフト制の(うん)働いてみたい。もうこんぐらいでいいかな。

112jfa : いいかな。

113kfa : はい。止めましょう。

(1) は会話の開始部と終結部であるが、7kfa、8jfa、9kfa、13kfa、113kfa の下線部において丁寧体が使用されている。kfa も jfa も共に他の部分では普通体を用いてざっくばらんに話をしていることから、これらの丁寧体の使用は形式の逸脱と言える。この形式の逸脱が修辭的表現と理解されるのは、その出現が会話の開始部と終結部であることに関係する。つまり、話者は文末のレベルをデフォルトの普通体からデフォルトではない丁寧体に移行させることによって「これから会話を始める」、「これで会話を終える」という「談話の局面の変化」を示しているのである(石川 2012)。

### 3-2. 形式の逸脱(非修辭的表現)

非修辭的表現となる形式の逸脱の例としては、終助詞「よね」の使用例が挙げられる。「よね」には「確認」、「聞き手の知識の活性化」といった用法がある(白石他 2001)。例えば(2)の75kfb ではその用法通りに「よね」が用いられている。

#### (2) 終助詞「よね」の使用例

70jfb : 何かさ、「友人名」のごはんおいしそうじゃない?

---

<sup>2</sup> 「#」は聞き取り不能を表す。

71kfb : え、あれ何？カレー？

72jfb : カツどん？

73kfb : ほんと？

74jfb : うん。

75kfb : あ、前言いよったよね、「友人名」。カツどんおいしいって。

76jfb : そうそう。

上例より、「よね」はある事実が正しいかどうかを聞き手に確認する際に用いられることが分かる。一方、(3)の45kfbを見ると、自分の推測の正誤を聞き手に確認する際に「よね」を用いることは難しいように思われる。

### (3) 形式の逸脱（非修辭的表現）の例

#### 〈アルバイトの話〉

37kfb : うん。だから、9時から始まったら(うん)、ごはんを3時、午後3時とかに食べるし。

38jfb : うそー？ きついやん。

39kfb : うん、きつい。お腹すく。すいてる。

40jfb : へえー。

41kfb : お腹すいた。

42jfb : そおー。

43kfb : え、「jfb」は？

44jfb : 私は、長い時は長いけど(うん)、短い時は3時間とかしかない。

45kfb : ごはんがないよねー。

46jfb : そうなの。

kfbは、話の流れから推測するに、「3時間しかアルバイトの時間がないということは、勤務中に食事をとる時間がないということか」のように、相手の話から自分が推測した内容の正誤を確認しようとしていると思われる。ここでは「ってことは、ごはんの時間がないの？」といった発話が望ましいであろう。本例から考えるに、事実の正誤ではなく推測の正誤を確認する場合、「よね」の使用は難しいと言える。本例でkfbが何らかの効果求めて意図的に逸脱を図ったとは考えにくいことから、この「よね」の使用は非修辭的表現と判断される。

### 3-3. 属性の逸脱（修辭的表現）

（４）、（５）は属性の逸脱の例で、女性話者が、一般的に男性的とされる表現を用いている様子が確認できる。

#### （４）属性の逸脱（修辭的表現）の例 その１

〈友人が食べているソフトクリームを見ている。ソフトクリームは購入者が自分で機械を操作して作る。〉

17kfa : おいしそうだね、[友人名]の。あれ。

18jfa : あ、また失敗しとるが。

19kfa : あ、またしっぱい。また失敗かよ。

#### （５）属性の逸脱（修辭的表現）の例 その２

〈アルバイトの話〉

255jfb : あー。え、週３とか？

256kfb : 週、４か。

257jfb : バイト？

258kfb : 週４。４回一区切り。水木、土日。土日と月土。

259jfb : え？

260kfb : 韓国のバイトもあるよ。

261jfb : あーうそ。すげ。

262kfb : やろ？、やろ？

（４）の 19kfa の「～かよ」も（５）の 261jfb の「すげ」も、男性が用いても粗野な印象を与える言葉遣いだが、男性が用いるより女性が用いた方がその粗野な印象は強くなる。以前に比べ若年層の女性が男性的な表現を用いることが多くなったとはいえ、kfa や jfb がいつでもどこでも男性的表現を無標で使っているとは考えにくい。彼女らは会話を楽しんだり盛り上げたりする手段として男性的表現を用いているのではないだろうか。彼女らは男性的表現を選択することによって、話し手と聞き手はウチの関係であることを暗示し、仲間意識の強化や親密度の確認を行っていると考えられる（石川 2012）。こうしたことから、この属性の逸脱は修辭的表現と解釈される。

修辭的表現となる属性の逸脱例をもう一例挙げる。

(6) 属性の逸脱（修辭的表現）の例 その3

- 221kmd : でもバイトで生活できんねー、日本で。  
222jmd : バイトだけで？  
223kmd : 16 万で、結婚して、生活できないね、確かに。  
224jmd : どうゆうこと？  
225kmd : 16 万円で、生活費で、足りる？足りんでしょ。  
226jmd : 足りん足りん。  
227kmd : 日本で生活したら。  
228jmd : 1 ヶ月で 16 万。  
229kmd : 足りない。二人だったら。  
230jmd : 二人は絶対無理やろ。絶対無理。  
231kmd : きちきち？  
232jmd : いや、絶対無理や。贅沢せんかったらいいけど。  
233kmd : いや、贅沢ーは、したいね。  
234jmd : 服も買わずに、飯も質素に。  
235kmd : 飯はいつも家で？  
236jmd : うん、家で。奥さんの手料理。節約料理。  
237kmd : ふーん。  
238jmd : [ 笑い ]  
239kmd : ごみばっかり。[ 笑い ]  
240jmd : [ 笑い ]  
241kmd : 今日は魚屋から内臓を拾って来ました。  
242jmd : [ 笑い ] 気持ちわりい。  
243kmd : 食べましょうか？  
244jmd : あー、内臓？  
245kmd : 内臓。  
246jmd : ふぐの内臓やないん？  
247kmd : [ 笑い ]  
248jmd : 死ぬよ。[ 笑い ]

下線部の 241kmd と 243kmd は普通体基調会話に現れた丁寧体であるため形式の逸脱でもあるのだが、kmd が自らを「奥さん」という別人に変化させ「奥さん口調」になっていると



考えられることから、この逸脱は属性の逸脱と言える。kmd は「奥さん」を演じていることを明確に示してはいないが、文体を変化させることによって一時的に「奥さん」として発話していることを暗示している。この逸脱は会話に面白みを持たせる、つまり冗談という効果を有するため修辭的表現に分類される。特に 241kmd は「内蔵を拾って来る」という突飛な内容と属性の逸脱が相まってより面白みを増していると言えよう。聞き手の jmd が kmd の逸脱の効果を的確に認識していることは、彼の「笑う」という行為から推測できる。

ただ、kmd の逸脱はいきなり出現したものではない。234jmd を皮切りに二人が「質素な結婚生活」の話を共同で作り上げている様子に注目したい。239km 以降は、話がかなりふざけた方向に向かっている。kmd の逸脱はこうした話の流れに乗って現れたものと解釈される。

kmd と jmd が互いの発話に同調しながら話を進めていることは興味深い。234jmd の「(節約のために) 服も買わずに、飯も質素に」に対して kmd は「飯はいつも家で？」と同調し、それに対して jmd は「うん、家で。奥さんの手料理。節約料理」と返している。悪ふざけ気味の 239kmd の「(奥さんによる節約料理は) ごみばかり」に対しては、kmd は突飛な内容と属性の逸脱、つまり「今日は魚屋から内蔵を拾って来ました」を用いて見事な反応を見せている。このように、相手の話に積極的に同調する様子は日本人同士の普通体基調会話にも観察されているが(王 2008、石川 2012)、今回の接触場面会話でも観察される結果となった。

### 3-4. 属性の逸脱(非修辭的表現)

最後に非修辭的表現となる属性の逸脱の例を見る。次の(7)の 53kmc と(8)の 234kmc の下線部では男性話者が女性的な印象を受ける表現を用いている。つまり、男性という自らの属性から逸脱した表現を用いているのである。しかし、この逸脱には冗談や同調、仲間意識の強化、談話の局面の変化といった、逸脱が生み出す効果は認められない。

#### (7) 属性の逸脱(非修辭的表現)の例 その1

- 50jfc : 〈IC レコーダーに触れながら〉どこから録音してんだろ。ここ？  
 51kmc : 多分、あ、ここ。  
 52jfc : ここ？ 〈IC レコーダーに顔を近づけて〉こうやって話した方がいいのかな。  
 53kmc : そうね。聞こえますかー。  
 54jfc : [笑い]  
 55kmc : だめか。

### (8) 属性の逸脱（非修辭的表現）の例 その2

〈ある集まりに誰が来るか話している〉

230kmc : で、{男性の名前} が来たら、その女の子も、来るから。二人は確定。

231jfc : [ 笑い ]

232kmc : ねー。

233jfc : へー。[ 笑い ]

234kmc : そうよ。

235jfc : ね、ピアスいつあけた？

236kmc : 俺？高校の2年生の時。

237jfc : ヤンキー。

238kmc : ヤンキー？

239jfc : 韓国じゃ普通？普通じゃないよね？

53kmc「そうね」及び234kmc「そうよ」は男女共に使用可能な表現ではあるが、同じく男女共に使用可能な「そうだね」や「そうだよ」のように判定詞を終助詞の前に挿入した表現に比べると、やや女性的な印象を受ける。Miura and Hanaoka (2008:34)では「だよ」と「だね」を moderately masculine の終助詞に分類している<sup>3</sup>ことから、男性話者は「そうね」、「そうよ」より「そうだね」、「そうだよ」を用いる傾向にあると言えよう。

会話全体から形成される kmc の男らしく少し悪ぶった人物像も彼の「そうね」、「そうよ」の使用が属性の逸脱となることを支持している。というのも、kmc は236kmcにあるように一人称として「俺」を使い、対話相手の jfc からは高校2年生の時にピアスをあけたことに関して「ヤンキー (237jfc)」、「韓国じゃ普通じゃない (239jfc)」と指摘されているからである。また、本例以外の箇所において kmc は二人称として「お前」を使ったり、「～すんなよ」といった粗野な表現を用いたりしている。こうした kmc の人物像に照らし合わせると、彼の「そうね」、「そうよ」の使用は、他の部分に比べるとここだけ女性的な表現が使用されている感が否めず、また、何らかの意図のある逸脱とも解釈できず、違和感が生じる結果となる。

### 3-5. まとめ：普通体基調会話教育の方法開発に向けて

今回採取したデータから、修辭的表現となる文体上の逸脱として、普通体基調会話における

---

<sup>3</sup> Miura and Hanaoka (2008:34)は“Women these days generally use moderately masculine endings in casual conversations”と述べている。

丁寧体の使用、女性による男性的表現の使用、別人を標示する表現の使用といった現象が抽出された。これらの逸脱にはそれぞれ、談話の局面の変化、仲間意識の強化／親密度の確認、冗談といった効果が認められた。普通体基調会話における丁寧体の使用、及び、女性による男性的表現の使用は、韓国人、日本人共に見られ、別人を標示する表現の使用は韓国人の発話に観察された。

文体上の逸脱は日本人同士の普通体基調会話に観察されていたのだが（石川 2012）、今回の接触場面会話の分析を通して、韓国人も効果的に文体上の逸脱を使用している様子が明らかになった。今回被験者となった韓国人は全員上級レベル以上の日本語能力を有し、且つ、日常的に普通体基調会話を行う環境にあることから、修辭的表現となる文体上の逸脱を問題なく遂行する能力が涵養されていた可能性が高い。また、今回の接触場面会話の分析を通して、日本人が韓国人に対しても文体上の逸脱を用いる様子が観察された。つまり、日本人は対話の相手が日本人か韓国人かに関係なく文体上の逸脱を繰り出しているのである。

今回データとした友人同士の接触場面会話において、韓国人も日本人も修辭的表現となる文体上の逸脱を用いていることが明らかになったが、接触場面というのは日本語学習者にとって実際の場面であることを考えると、普通体基調会話教育の場において文体上の逸脱の方法とその効果を明示する必要があるだろう。日本語学習者にとって文体上の逸脱の使用は必須ではないが、日本人が文体上の逸脱を行った場合、その意図を的確に把握する必要がある。例えば、終結の意図のもと丁寧体が選択されたにも関わらず、それに気付かず話し続けた場合、「話が長い」とか「察しが悪い」といった悪い印象を相手に与えてしまう恐れがある。普通体基調会話教育において文体上の逸脱に言及することは、日本語学習者と日本人の良好な人間関係の構築のためにも必要である。

非修辭的表現となる文体上の逸脱としては、「よね」、「よ」、「ね」といった終助詞に関する問題が観察された。終助詞に関する問題は中級から上級レベルの日本語能力を持つ韓国人が産出した普通体基調会話にも散見されたが（石川 2012）、今回被験者となった上級レベル以上の韓国人にも観察されたことは興味深い。「よね」、「よ」、「ね」といった一部の終助詞に関しては、上級レベルであっても、また、日常的に日本語を使用する者であっても、その習得が難しいことが示唆される。この件はより多くのデータを収集して検討すべき課題であるが、現行の日本語教育において、終助詞に着目した訓練があまり行われていないのも事実である。「よね」に関して言えば、その意味機能が「未だよく分かっていない（西郷 2011:108）」という意見もあることから、「よね」そのものの解明にも注視する必要がある。終助詞の問題は普通体基調会話に限ったものではないが、普通体基調会話教育の方法開発においては終助詞にまつわる問題も考慮すべきである。

#### 4. 今後の課題

今後は、まず、石川（2012）で韓国人同士及び日本人同士の普通体基調会話を分析した際、文体上の逸脱だけでなく発話行為遂行上の逸脱も観察されたことを踏まえ、接触場面会話における、発話行為遂行上の逸脱の分析を行いたい。今回採取したデータにも発話行為遂行上の逸脱が認められたが、これに関しては稿を改めて論じる。

また、今回のデータと同条件の接触場面会話を多く入手し、文体上の逸脱の事例をより多く採集、分析する必要があると考える。更に、日本語学習者が文体上の逸脱を使用した場合は、彼らがどのように文体上の逸脱を習得するに至ったかをインタビューやアンケートを通じ明らかにしたい。彼らは母語での習慣をそのまま転用しているのかもしれないし、日本人の話し方を観察して習得したのかもしれない。もし後者の方法で文体上の逸脱を習得した学習者がいた場合、その習得過程が記述できれば、普通体基調会話教育の教授法や教材の開発に応用することができるであろう。

#### 参考文献

- 因京子、王龍 2007「日本語教材の普通体会話の提示と会話实例の質的分析—若い男性話者による会話を中心に—」  
『東アジア言語文化研究』8、139-166
- 因京子、松村瑞子編 石川朋子、久志唯、王龍、崔緯卿、李巍巍、李奈娟 2008『平成 19 年度会話資料集』九州  
大学比較社会文化学府日本社会文化専攻日本語教育講座
- 現代日本語研究会 遠藤織枝、小林美恵子、佐竹久仁子、高橋美奈子編 2016『談話資料 日常生活のこぼれ』ひつ  
じ書房
- 石川朋子 2012「くだけた会話の教育方法開発のための基礎研究—若年層の韓国人日本語学習者を対象として—」  
博士論文、九州大学大学院比較社会文化学府
- 石川朋子 2015「韓国人日本語学習者と日本語母語話者による接触場面会話の分析—若年層の友人同士の場合—」  
『韓国日語日文学会 2015 年冬季国際学術大会発表論文集』、298-301、韓国日語日文学会 2015 年冬季国際学  
術大会、2015 年 12 月 19 日、韓国外国語大学
- 石川朋子 2017「普通体基調会話に出現する修辭的表現に対する韓国人大学生の認識と解釈」『東アジア日本語・  
日本文化研究 新機軸の日本語・日本語教育研究』第 22 集特別号、東アジア日本語・日本文化研究会、57-  
69
- 梶原綾乃 2003「留学生と日本人学生の交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』  
117、93-102
- 韓国語ジャーナル編集部 2007『韓国語学習 Q&A』アルク

金水敏 2003『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

松村瑞子 2018『九州大学大学院言語文化研究院 FLC 叢書XII 日本語のポライトネス—異文化理解教育の方法開発に向けて—』花書院

Miura, A. and Hanaoka McGloin, N. 2008 *AN INTEGRATED APPROACH TO INTERMEDIATE JAPANESE (Revised Edition)* Tokyo: The Japan Times.

王龍 2008「若い男性の話し方の特徴—九州大学農学部の一研究室の場合—」『東アジア言語文化研究』9、99-117

西郷英樹 2011「日本語教科書での終助詞「よね」の扱いに関する一考察」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第 21 号、89-114

酒井彩 2018「友人同士の会話で使用する形容詞の活用の分類と体系」『九州大学留学生センター紀要』第 26 号、25-31

白川博之監修 庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘著 2001『中上級を教える人のための 日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

